

彙報

第一五回総会および研究集会

木簡学会第一五回総会と研究集会は、一九九三年二月四、五日の両日、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂で、会員約一八〇名が参加して開催された。会場には、平城宮第二四一次調査出土木簡・長屋王邸宅跡出土木簡（以上、奈良国立文化財研究所）、平城京右京二条三坊四坪出土木簡・大安寺出土木簡（以上、奈良市教育委員会）をはじめ、研究集会で報告のあった山里純一氏収集の沖繩の呪符木簡（フーフダ）などが展示された。

◇二月四日（土）（午後一時～五時）

第一五回総会（議長 青木和夫氏）

狩野久会長の挨拶で開会された。その中で、会員募集の二年間の停止期間が終わって新たな基準による入会審査を行なうようになるにあたり、木簡学会が実物をもとにした学会で、他と異なる性格を持っていることから、発掘調査機関との信頼関係を築き、あわせて会員全員の顔が見える学会にしたいという希望が述べられた。

会務報告（館野和己委員）

新入会員はなく、逝去二名で、現在二八八名であること、委員会を四回開いたこと、新幹事として今津勝紀氏が入ったこと、会のあり方を審議する小委員会を設け今年度は五回開いたこと、会員サービスタとして『平城木簡概報』二七、二八、『藤原木簡概報』一一、各一、奈良市教委記者発表資料を配布したとの報告があった。

編集報告（東野治之委員）

『木簡研究』一五号の編集経過について説明があり、一四号よりも五〇頁少ないが、印刷費が前年度よりも上昇したので、頒価は前号と同じく四五〇〇円とする旨の報告があった。

会計・監査報告（綾村宏委員・笹山晴生監事）

綾村委員から一九九二年度の会計報告が行なわれ、続いて笹山監事から、会計が適正に行なわれている旨の報告があった。その後、会員問題の提案の後、一九九四年度予算案について説明があった。会員問題についての提案（佐藤宗諱委員）

二年間凍結した新規会員の問題について報告があった。現在、四〇歳以上の会員が全体の七七パーセントを占め、若い会員の入会が必要との認識が示された。その上で、以下のことが提案された。

一、入会基準として、木簡についての研究歴・調査歴、推薦者の意見・研究計画を重視する。そのため申込用紙を変更するとともに、次年度は五月末を入会申し込み締め切りとする。また、調査団体を団体会員とし、新たに会誌購読会員を設ける方向で検討する。

二、研究会については、各地域で積極的に開き、まず次年度は新潟市で開催したい。また、従来の研究会は、展示木簡をめぐる実質的討論の場として位置づける。

三、会活動の円滑化を図るため、会員の木簡調査に予算(調査費)を計上するとともに、委員会・幹事会の充実が必要である。後者については、委員会の開催回数を増やし、委員の役割分担を決めるなどして、討議の深化をめざす。幹事については、人材の確保が難しいなかで、そのあり方を早急に検討する必要がある。

四、会誌の編集については、編集体制の再検討を行なう必要がある。また、会誌執筆者に調査協力費を支給していく。

五、会費については、会財政が単年度赤字になったことと、前記のような会活動の前進を図るため、一万五千円に増額する。

以上の五点についての提案に対して、基本的な方針を承認し、細部については委員会で具体化することに決まった。

特別研究会開催についての報告(平川南委員)
一九九四年九月二三日・二四日、新潟大学の小林昌二氏を中心に、八幡林遺跡出土木簡などの検討を課題にして開催する旨の報告があった。

研究会(司会 和田萃氏)

沖繩の呪符木簡について

いまに息づく呪符・形代の習俗

山里純一氏

奥野義雄氏

山里氏の報告は、沖繩県に今も魔除けの札として残る護符についてのものであり、神社や寺の発行するもの、個人で書かれた護符、墓の護符などがあり、一五世紀ころに中国から呪符が渡来してきたことによる可能性を指摘された。

奥野氏の報告は、民俗学からのアプローチで、五大力尊呪符、物忌札、大般若経転読札などについて詳細な報告があった。

右の二報告は本号に掲載することができた。
研究会の終了後、同じ会場で懇親会が行なわれた。

◇二月五日(日)(午前九時～午後三時)

研究会(司会 松下正司氏・鎌田元一氏)

一九九三年全国出土の木簡

渡辺晃宏氏

平城京右京二条三坊・三条三坊の調査

西崎卓哉氏

渡辺氏の報告は、一九九三年に全国で木簡が出土した六八の遺跡の概要と木簡の内容を説明したもので、多くは本号に掲載できた。

西崎氏の報告は、平城京右京域の調査で検出された遺構や出土遺物と、出土木簡の関係など、多岐に及んだ報告であった。

午後の討論では、二日間わたった報告について、活発な討論が行なわれた。最後に早川庄八副会長から閉会の挨拶があった。

新潟特別研究会

一九九四年九月二三、二四日の両日、新潟市において特別研究会が開催された。奈良以外の地における研究会として初めての試

みであるだけでなく、実際に木簡が出土した現地を見学して遺物を
実見し討論を行なうという、遺跡・遺物一体となった木簡研究本来
のあり方に適う誠に意義ある研究会となった。

今回の研究会は、木簡学会の主催のもと、実務は新潟大学の小
林昌二氏を委員長として組織された実行委員会（委員 石上英一氏、
鬼頭清明氏、熊田亮介氏、坂井秀弥氏、佐藤信氏、鈴木靖民氏、関
和彦氏、館野和己氏、平川南氏、本郷真紹氏、前沢和之氏）が担当
し、各教育委員会をはじめ地元の方々の多大のご協力を得た。ご後
援いただいたのは、次の各機関である。新潟県教育委員会・新潟市
教育委員会・白根市教育委員会・豊浦町教育委員会・黒埼町教育委
員会・神林村教育委員会・笹神村教育委員会・和島村教育委員会・
④新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟日報社・BSN新潟放送。ま
た、通常の研究会では参加者を会員に限定しているが、今回は地元
の調査研究者や大学院生などにも参加を呼びかけた。

◇九月二三日（金）（午前九時～午後五時）

バス計四台で二班に別れて遺跡・遺物の見学を実施した。まず、
新潟市立白新中学校体育館において、新潟市教育委員会の小池邦明
氏と黒埼町教育委員会の渡辺ますみ氏から説明を受け遺物を実見
したあと、和島村に向かう途中整備された的場遺跡を車中から見学
した。昼食の後、和島村立北辰中学校体育館において、和島村教育
委員会の田中靖氏から説明を受けながら遺物を実見、ついで八幡林

遺跡の現地見学を行なった。展示された遺物は、白新中学校では、
的場遺跡出土木簡・緒立C遺跡出土木簡、北辰中学校では、八幡林
遺跡出土木簡・山田郷内遺跡出土木簡・門新遺跡出土漆紙文書など
である。その後新潟大学生協食堂において、懇親会を行なった。見
学の参加者は計一七五名であった。

◇九月二四日（土）（午前九時～午後四時）

「古代越後と木簡」と題して新潟大学人文学部において研究会
を開催した。報告は次の五本である（司会 鬼頭清明氏・熊田亮介
氏）。

国史跡指定答申なった八幡林官衙遺跡

小林昌二氏

八幡林遺跡の概要

田中 靖氏

古代越後平野の環境・交通・官衙

坂井秀弥氏

郡符木簡と封緘木簡

佐藤 信氏

八幡林遺跡と地方官衙論

平川 南氏

その後、これらの報告をめぐって予定時間いっぱいまで活発な討
論が行なわれた。参加者は会員八四名、非会員一二四名の計二〇八
名で、地元研究者や若手研究者の参加がめだった。以上の報告につ
いては『木簡研究』一七号（一九九五年一月刊行予定）に掲載を
予定している。別室では、二三日の展示遺物に加えて、神林村平林
城跡出土木簡・白根市馬場屋敷遺跡出土木簡・豊浦町曾根遺跡出土
木簡・笹神村菟久遺跡出土木簡・出雲崎町番場遺跡出土木簡・同町

寺前遺跡出土木簡・新潟市山木戸遺跡出土木簡・横越村上郷遺跡出土木簡などの展示を行なった。

なお、九月二十五日(日)には、越後木簡シンポジウム実行委員会主催、木簡学会などの後援により、「越後木簡シンポジウム」『今よみがえる越後の古代』が、新潟市万代市民会館ホールにおいて開催された。計三三〇名の参加者があった。

委員会報告

◇一九九三年一二月四日(土)

於奈良国立文化財研究所

総会に先立ち、会務について『木簡研究』一五号の完成、『平城木簡概報』二八の配布の報告があった。また、『木簡研究』一五号の編集報告、第二次会計中間報告、当日の研究集会の持ち方について議論が交わされた。さらに、二年間にわたった新規会員の凍結が解除されるにあたって、入会希望者の審査に際し、木簡に関する業績を重視し、実質的な審査を行ない、調査機関の団体加入を求めるといった意見が出された。会費も、現行の一万円から一万五千元への改正案が総会へ正式に提出されることが決定した。なお、一九九四年九月に新潟で特別研究集会を開催することとし、そのための実行委員会を設けることなどが提案された。

◇一九九四年六月六日(月)

於奈良国立文化財研究所

会務について幹事の交替(森公章氏から大隅清陽氏へ)、会計について一九九三年度の決算報告とその監査報告がなされ、いずれも

承認された。また、『木簡研究』一六号の編集は和田萃氏を中心に行なわれることも併せて承認された。次に、入会希望者の審査が行なわれ、次回委員会まで継続審議することになった。新潟特別研究集会については、実行委員会から準備状況の報告があり、日程と報告内容案などを了承した。一九九四年の総会・研究集会についても意見が交換された。

◇一九九四年一〇月三十一日(月)

於奈良国立文化財研究所

初めに、奈良県立橿原考古学研究所の鶴見泰寿氏を幹事に補充することを了承した。続いて、一九九四年度の会計中間報告、新潟特別研究集会の結果報告(前項参照)、『木簡研究』一六号の編集経過についての報告があった。その後、第一六回総会・研究集会の日程と内容について決定した。引き続き入会希望者の審査にうつり、木簡に関する論考・調査歴、木簡研究計画などを中心に検討を行なった。審査のあり方をめぐっては活発な討論がなされ、特に今後の木簡研究計画を重視すべしとの意見が大勢を占めた。その後各申込者について厳正な審査を行なった結果、最終的には一九九人全員の入会が認められた。また、来期の委員改選について話し合った。